

都道府県別賞一等

「ありがとう」

埼玉県 埼玉大学教育学部附属中学校 二学年

太田 遥子

この夏、私は生命保険のありがたさを深く感じた。私と、私たち家族が今こうして暮らしているのは、生命保険の制度と、もしものときに備えた両親の判断と積み重ねがあつてのものだとわかつたからだ。

夏休みに生命保険の役割などについて考える機会があり、資料を読んで、私の家ではどうかと母にたずねてみた。

父はこれまで四度、母は一度、生命保険にお世話になっていることを知り、ものすごく驚いた。特に、私も覚えている三年前の父の四度目の入院と手術のときには、本当に助かつたと母が話してくれた。

父は、三年前に僧帽弁閉鎖不全症と診断された。心臓の病気だ。血液の流れを調整する弁の一つがうまく閉じない。閉じるようにするためには、外科手術がどうしても必要だつたが、身体に大きな負担がかかる。手術後の回復にも時間がかかる。何よりも父と母には『もし、手術が成功しなかったら』という、どうしても手術に踏み切れない心配があつた。母は必死に調べて、内視鏡手術用支援ロボット『ダビンチ』を使った最新技術の、身体に負担の少ない手術があることを知り、父と相談。父は、病気を見つけてくれた主治医の先生に『ダビンチ手術』を、手術ができる病院で受けたいと相談した。主治医の先生のお兄さんが、他府県の遠くにある手術ができる病院の副院長先生だということがわかつた。主治医の先生も、父も母も驚いた。

これは手術を受けなさいということに違いないと、より意思は固まつたが、両親には実はもう一つ心配ごとがあつたらしい。車を一台買えるほどの手術の費用だ。他の術式と比べると入院日数は少なく、回復期間も短いけれど、会社を休むことにはなる。収入面も気になる。しかし、「費用面はなんとかなる。悪化しないうちに手術を受けよう」と両親が落ち着き決心することができたのは、父が生命保険に入っていて、手術、入院、通院の給付金を受け取ることができるかわかっていたからだつたそうだ。今回、話を聞くまで全く知らなかつた。父だけではなく、母も、私も生命保険に助けられていたのだ。ありがたいねと母と話した。

「保険がきかなくてもロボット手術を受けるつもりだつたが、対象になつて助かつた」と、後に父が人に話していたとおりに、ちょうど手術を受けた、私が小五になつた四月から公的保険の適用となり本人の負担は、結果としては他の

第59回中学生作文コンクール

外科手術と同じほどになった。

でも、母は

「公的保険の適用になって、もちろん助かったけれど、入院、手術ともなると想定外の、どうしても必要な大きな費用がかかる。けれども、給付金を受け取ることができると、費用面については安心できて、本人の身体のことだけを一心に考えることができるようになる。だから自分たちでも生命保険に入っている」

と教えてくれた。

また、病気によつては、患った後からは生命保険に入れないことがあることも教えてくれた。父と母は、結婚する前にそれぞれ一つずつ生命保険に加入していて、結婚してからは二人で話し合つて、長く続くこれから先に必要だと思ふ保険に入れるうちにと追加で加入し、そして私が生まれるときに、父が万一のときには学費に困らないようにとさらに加入した。リスクに備えてきてくれていたのだ。

『二人はみんなのために、みんなは一人のために』という言葉は、お互いに助け合う相互扶助という仕組みを表しているのだということ、生命保険の制度を介して積み重ねられた多くの人の保険料によって助けてもらっていること、同じように、コツコツと積み重ねること自分たち以外のだれかの助けにもなっていることを知った。私も社会に出たら、自分が主体となって加入することを考えよう。

『お父さん、お母さん、私を守ってくれてありがとう』という気持ちをいつも忘れずに精いっぱい感謝しようと思う。